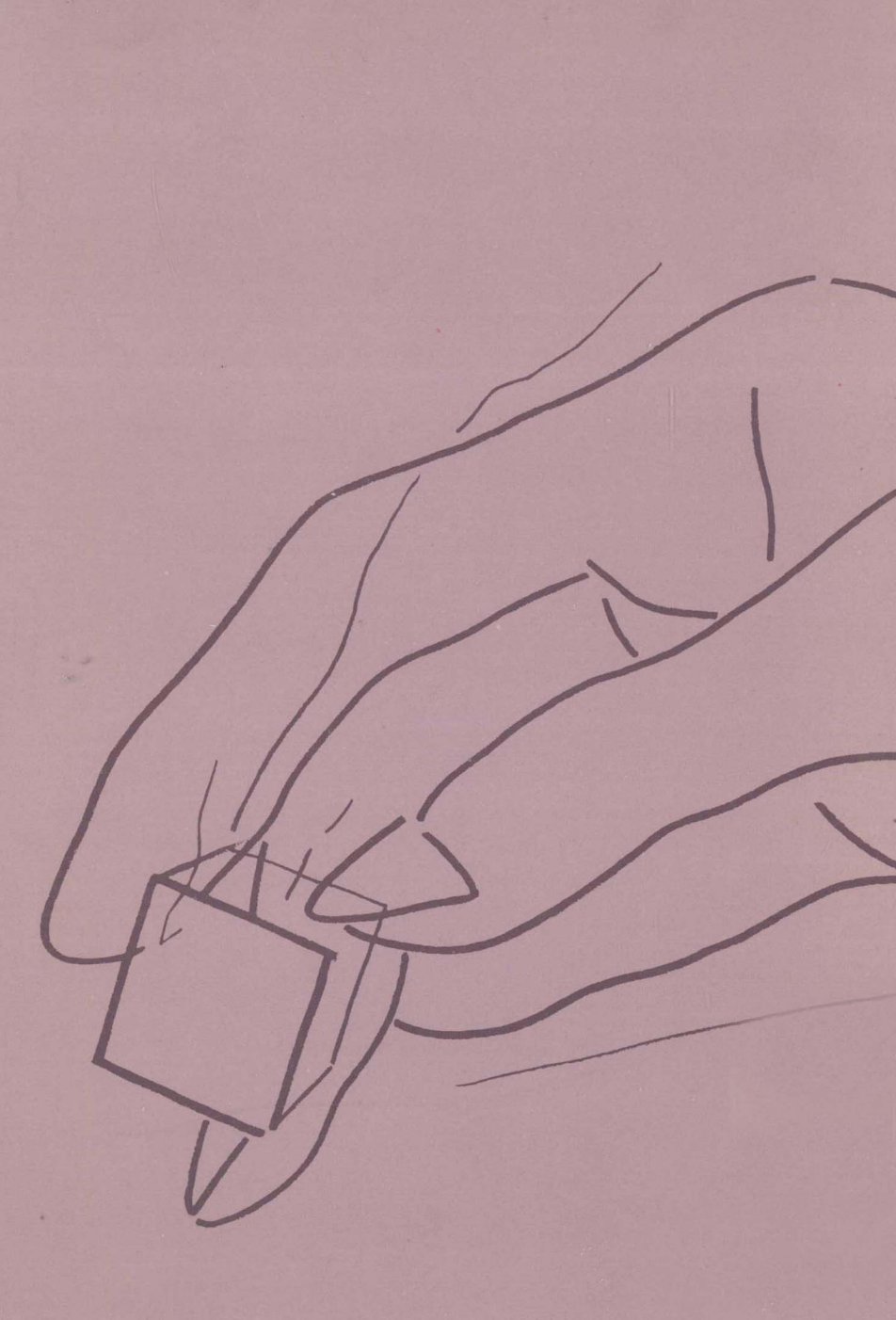


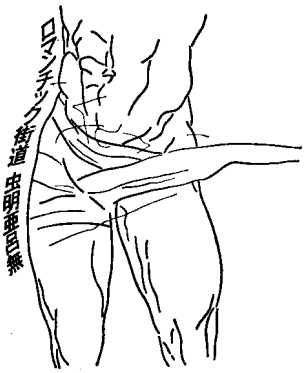
・ロマンチック街道

・発行――一九七九年五月一日
・著者――虫明亜呂無
・発行者――矢崎泰久
・発行所――株式会社話の特集
・住所――東京都渋谷区神宮前四―三〇―六―七八九
・電話――〇三（四〇五）〇八一〇
・製版印刷――凸版印刷株式会社
・落丁本は本社にてお取替えします
・定価――一二〇〇円

マシチック街道

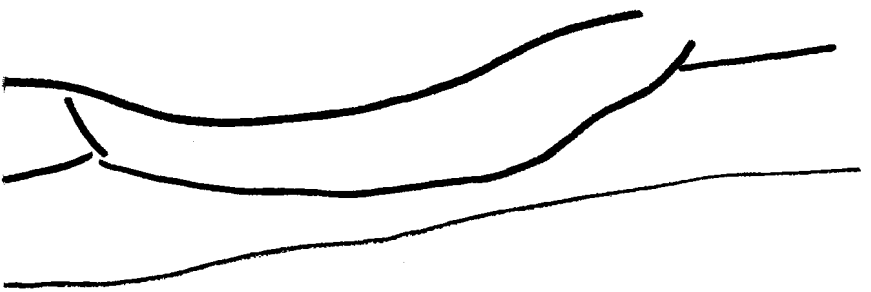
虫明亜呂無

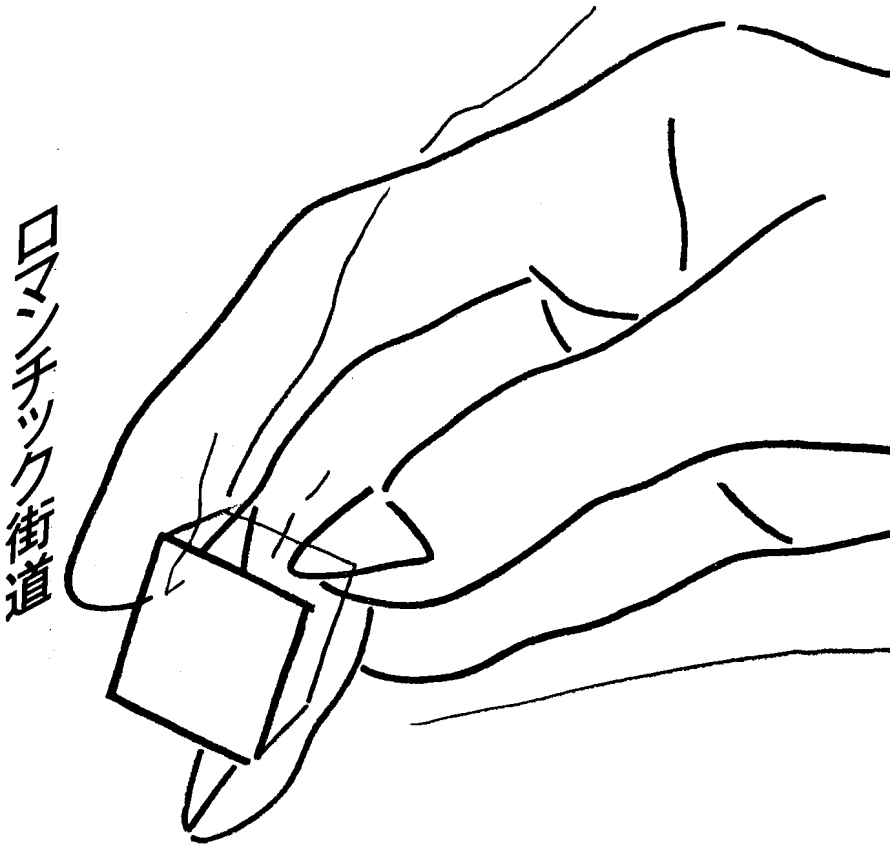
ブックデザイン／石岡琰子・成瀬始子　イラストレーション／吉田カツ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ロマンチック街道 6
オリンピック・ダハウ・ゲットー 22
あの女だけには 38
もっと簡単に 54
アメリカの野球 68
おんなの極道 80
大理石の碑 98
坂道の家 118
英国庭園 162
北斗七星 194





ロマンチック街道

メラニーを聴いている。

朝から、夜更けまで、聴いている。来客がある。だれもが彼女の歌に耳をかたむける。歌がおわって、ある編集者は、「社に帰るのがいやになった」と、ため息をついた。

メラニーの歌には、微妙な女性の恋愛感情と、恋への憧れと、流浪への誘惑と、素朴な宗教感情がこめられている。山から野へ、村から丘へとさすらう生活への郷愁がある。

メラニーがウッドストックの人気者だったのがわかるような気がする。彼女がアズナブールに招かれて、パリのオランピアで歌ったが不評だったのも、当然におもわれる。頽廃と背中あわせの繊細さは、メラニーからうかがいしるよしもない。

メラニーの歌を聴いていると、僕には、はるばるとつらなるアメリカ中央部の山脈や、はてしない田園、それもオークル・ジョオン色に輝く秋の小麦畑が想像される。人はそこで陽光をあびて耕し、収穫をいそぎ、霧のなかで灯をともす。

I wish I lived a blessed life
Home grow food, Christ on Sunday
In the northern light I wander

That is where I'll be

私は人びとの円の中心にいて、私が心から必要とする人の体に、身をあずけたい……と、彼女は歌っている。

このような歌詞に、乾いた声がながれ、ギターや、ハモニカの単調な伴奏がしたがう。余談だが、このときから数年して、僕は中島みゆきにはじめて会ったとき、彼女が「若いとき、メラニーに一番影響を受けた」と語ったのを聞いて、いっぺんに中島みゆきが好きになってしまった。中島みゆきの歌にはメラニーの良い部分の痕跡が、濃厚にゆきわたっている。

僕はいま、『シェラ・クラブ・エギジビット・フォーマット・シリーズ』という、一連の豪華写真詩集シリーズを愛読している。最近ネバダを舞台にした小説を書いたのだが、石岡瑛子さんが、ネバダならこの本を参考にするがよいと、十六冊の全集をそろえてくれた。荒涼とした砂漠をつらぬくひとすじの街道、草原、丘陵、住民、教会、辺境の町、そして、動物や植物の分布などを写して、この写真詩集は、広大無辺の荒地をさまようものの情念をあらわしている。その風景にメラニーの歌がかさなってくる。僕は小説の終りのほうで、彼女の歌がきこえてくる情景をつくった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

さきの札幌オリンピックが終ったのち、僕はカメラマンの鈴木達夫さんたちと、野付崎の尾岱沼へ行った。

ここは白鳥の群生地として知られている。知床半島から、野付崎一帯の海は厳寒期に、堅氷にとざされる。海は氷で輝く。が、尾岱沼の海は、ごくすこしの部分だけしか凍らないのである。白鳥は早朝、午前六時、陽の光とともに、尾岱沼の海面に飛んでくる。その数、約三千、多いときには四千に達する。横一帯にひろがった白鳥群が、海をとざす深い靄のなかからあらわれ、ヒヤシンス色の太陽の光線を斜めによぎって、流氷をかすめながら水面に舞いおりてくる。

僕らは、毎日、午前四時に起床して、白鳥を待った。

零下二十度の寒さにふるえながら、撮影のタイミングをねらった。夜と暁のさかい目で、光と闇があらそっている。そのなかから白鳥は幻のはかなさで姿をあらわしてくる。僕らは機関銃射手のように、白鳥にカメラをかまえる。例のオリンピック映画のジャネット・リンのスケーティングのシーンに白鳥の群翔をかぶせるためであった。これはリンのフィギュアが白鳥を思わすのでなく、彼女の滑る氷面がハレーションをおこすのでやむなく白鳥の飛翔をかさねていくのである。

暁闇の撮影がおわると、僕は日課のように、自動車に距離用スキーをのせて、中標津、計根別、虹別などをまわった。虹別から弟子屈に至る街道は、雪の大平原のなかをまっすぐに走っている。左右は地平線だけしかみえない。電信柱の列がつづいて、風景は死にたえて、風と吹雪の音しかきこえてこない。僕は自動車をとめ、8ミリをまわした。さえぎるもののない広さのなかで、身をきる寒さと、地平線上の雲の流れだけが、僕に生きている実感を教えてくれる。僕は日本のネバダは、ここだろうと、かねてから思っていたので、あるときは距離用スキーをはいて、街道からはなれて野のはてまで行ってみたが、野にはてはなかった。僕は野の中にたたずんだまま、息をのんで、雪原と流雲の眺望をみつめた。よく晴れた日に、かすかに、弟子屈の街の光の反射が、空にきらめいたように錯覚された。

夜は吹雪にくれた。風が地をどよもした。ホテルのガラス窓が、僕らの見ている眼の前で、瞬時に雪に埋れていった。尾岱沼そのものが流氷にのって、海上をさまよっているように揺れていた。地の底から、音響がとどろいた。

僕らは火をかこんでバーボンを飲んだ。

僕らに三人の女性が同行していた。札幌オリンピックで働いていたコンパニオンの

女性たちである。彼女らは例外なく美貌であったし、語学に熟達していた。ひとりは七千人から三名をえらぶ招待留学試験をとおってバージニア大学のメリー・ワシントン・カレッジに入り、現在は外国資本の銀行に勤めている。ひとりはおなじく留学生試験をとおり、デュッセルドルフ大学で数学を専攻し、ながく、フランクフルトの理化学研究所で働いていた。三人目の女性は、海外放送のフランス語を担当している。万博にしろ、札幌オリンピックにしろ、共通してコンパニオンの質の悪さは、いたるところで指摘されたが、彼女ら三人にかぎっていえば、その通訳技術の熟練さと、それを裏づけている常識の広さでは、いささかも非難されることがなかった。発声といい、用語の適確な選択といい、彼女らの語学は、あきらかに、基礎の上に現地で実際に身につけたものがくわわって、ふしぎな魅力をそなえていた。なによりも実務にかなった、適切な語法が快かった。

僕らは、札幌を自動車で発って、十分後にうちとけあった。昼こそ層雲峡のふもとのドライブ・インで、男女は席をへだてて食事をとったが、夜食には早くも一室に会して歓談をまじえるにいたった。

彼女らは、なぜ、僕らに付いて尾岱沼や知床へ来たのか。

理由は明快である。

彼女らは女性としては、津田塾とか、東大の一流のエリート・コースを歩んできた。長く国費による留学生生活を送り、帰国後も、女性としては最高の職場についていた。銀行づとめの女性などはこの五月のEC会議に、業務報告のためにブラッセルへ行くほどである。反面、彼女らの生活は激烈な競争試験の連続と、しわぶきひとつにも心しなくてはならない勤務のつみかさねである。そうした彼女らの目から見ると、僕ら撮影キャメラマンとか、もの書きは、どうみても「ヤクザ」なのである。寒暁の氷の海で、いつ撮れるかわからない白鳥の飛翔を待ちわびていたり、なにもない大雪原で、一本の道をああでもない、こうでもないと撮りあぐねているのは、虚仮(こけ)のかぎりと思われる。が、その虚仮の実態こそ、彼女らが青春を賭けて、じつは、ひそかに垣間みようと願ってはたさなかったものだった、というのである。

僕らは、尾岱沼から網走へ、そして紋別へとオホーツク海を北上した。吹雪にあけ、吹雪にくれながら、僕らは流氷をもとめていった。海水の色に、重さと鈍さがくわわるにつれ、僕らは、はじめ片々とした流氷の漂泊と認めたものが、やがて、氷壁とみまがう流氷群の燦然とした集積にかわってゆくのを遠望した。夜にはオーロラに似た青磁色の光が漆黒の空を縫った。流れ星が光軌をひいて冥暗のはてにおちていった。奇蹟を待ちあぐねるように、僕らは夜を待った。

僕はなんとなくメラニーの歌や、ネバダの砂漠の延長のうえに、僕らの日常がいとなまれている幻覚にとらわれた。それから、ふと、夏の大西洋のニューファンドランド島のちかくで見た流氷群の記憶をよみがえらせたりした。

そうしたある夜、ドイツに留学した女性が、数歳年下のダンプカーの運転手と結婚していると語って、僕を驚かせた。彼女はせっかくドイツで数学を研修したものの、日本では、その特技を生かせる職場に恵まれず、といって、大学その他に奉職することもできないままに、ある時、偶然、知りあった少年に犯されるような経過をたどり、いつのまにか彼の妻になったというのである。

数学という抽象観念の追求に日常をすごしていた彼女は、帰国しても、配偶者にふさわしいだけのなま身の青年にはついぞめぐりあわなかった。彼女に男のなま身をたしかめるすべがあったのか、なかったのかは、わからない。いずれにしても彼女の目に映ったのは、妙に蒼ざめ、小器用に現実的に立ち振舞うことに執心し、理屈ばかりこねまわす青年たちだけであった。数学という観念の世界を生活原則としている彼女にとって、日頃からいたずらに観念的言辞をもてあそぶ青年は、およそわずらわしく、魅力のないものにしか受けとれなかった。そこへ、颯爽として、裸一貫、教育も

満足にうけてないが、筋骨のみいちずに逞しい少年が彼女の前に、たちはだかった。彼女は少年に体をかさねられて、気がついたときには彼の膝下を夢うつつの状態で彷徨していたわけである。

僕は話を聞きながら、この明眸皓歯、端麗きわまりない女性が、夫である少年にかしずき、閨房でときに陶酔に浸り、ときに苦悶に表情をゆがめるさまを想像しないではいられなかった。ダンプは下関、大阪、東京、青森、札幌ととんぼがえり、時には大阪から日本海に出て山陰をぬけ、関門海峡をくぐり、長崎へと往復したりする。彼女は大阪の玉造の安アパートの一室で、ひたすら少年の生命の安否を気遣い、その心労をわずかに家事にまぎらわす生活がつづいた。

僕は僕の知っているかぎりの、彼女が足跡をのこしたというドイツの街々の光景を思った。彼女が季節ごとの休暇をすごしたフュッセンから、中世都市そのままを再建したローテンブルク市などをふくんだヴュルツブルグへ至る「ロマンチック街道」は、ババリア文化の粋を今に残す、八世紀にできた街道である。樹々は爽やかで遺跡はいたるところに散在する。僕はかつて、ミュンヘンの「ドイツ博物館」で落雷の実験を目撃したり、ダム工事の基礎理論を実際に教えてもらった経験があるが、彼女もまたおなじように「ドイツ博物館」にかよい、ドイツ科学の精華に驚嘆し、アルテ・

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com